

第9章

対象事業に係る環境影響の総合的な評価

第 9 章 対象事業に係る環境影響の総合的な評価

平成 26 年 7 月から平成 28 年 2 月にかけて実施した事後調査の結果と、環境影響評価結果との比較検討の結果は、主に以下のとおりです。

陸域動物（陸生動物）については、工事前及び工事中に実施した鳥類の営巣状況調査の結果、コゲラなど 1～5 種の鳥類の繁殖が確認されました。実施された工事は、主にキャンプ・シュワブ敷地内の作業ヤードの整備に向けた既設建物の解体工事であり、繁殖期間中に営巣箇所周辺における施工はなかったことから、立ち入り制限などの環境保全措置は実施していません。

陸域生態系のうち、基盤環境及び生態系の機能と構造については、工事前に実施した植生調査の結果、環境影響評価書時から工事前にかけての植生の主な変化として、キャンプ・シュワブ地区の隊舎等の造成工事により、小河川や斜面で見られた湿性植生やリュウキュウマツ群落が裸地、緑化法面、舗装道・構造物等になったことが挙げられます。また、丘陵地斜面の尾根から斜面上部にかけて広域にあったリュウキュウマツ群落やリュウキュウマツ-ススキ群落がイジュータブノキ群落に変化していましたが、これは、マツノザイセンチュウによるマツ枯れやその対策の伐倒、自然遷移の進行が要因でした。

キャンプ・シュワブ地区の隊舎等の造成工事による小河川や湿性植生の消失や減少に伴い、鳥類、両生類、魚類、昆虫類、甲殻類、クモ類、貝類等の生息環境が減少し、消失や減少した箇所での生息状況は悪化している可能性が考えられますが、調査地域全体の動物相の状況として、事後調査における確認種数は工事前の確認範囲内もしくはそれ以上であり、重要な種の出現状況も工事前と同程度となっていました。これらのことから、確認種数に大きな変化はみられず、調査地域における種の多様性は保持されていると考えられました。

地域を特徴づける注目種について、ミサゴ、ツミ、アジサシ類、シロチドリの生息・繁殖状況の調査の結果、演習場地区やキャンプ・シュワブ地区のリュウキュウマツ群落の減少に伴い、リュウキュウマツを営巣に利用するツミの繁殖状況に変化が生じる可能性が考えられます。しかしながら、演習場地区では平成 20 年以降、継続して営巣が確認されており、工事中においても繁殖の成功が確認されました。キャンプ・シュワブ地区はこれまでも営巣に利用されていません。

実施された工事は、主にキャンプ・シュワブ敷地内の作業ヤードの整備に向けた既設建物の解体工事であり、ミサゴやアジサシ類の採餌場である沿岸域、アジサシ類やシロチドリの繁殖地である岩礁や砂浜、ツミの生息・繁殖場である樹林地は、工事の実施に伴う改変は生じていません。

以上のことから、事業の実施に伴う影響を最小限に留めることができ、環境影響評価書に示した環境保全措置を実施することにより、環境影響を低減できていると

考えられ、第8章に示したとおり、新たな環境保全措置を講じる必要はないと考えました。

よって、今後も引き続き事後調査を実施し、本事業による環境変化、環境影響の把握に努めていくこととします。